

## 「被災地に対して何か出来ることがあるのでは」 との思いから復興庁市町村応援職員に応募

東日本大震災が起こったとき、坂本さんは青年海外協力隊としてモロッコに派遣されていました。モロッコでは、卓球の経験を活かして地域のクラブチームやナショナルチームのコーチを務めたりと、日々忙しく活動していましたが、震災のニュースを聞いてからは「同じ日本人が大変な思いをしている時に、自分はモロッコにいていいのか」「被災地に対して何かできることはないか」と考えるようになりました。

帰国後、青年海外協力隊のOBを対象に、復興庁が応援職員を募集しているのを見て、すぐに応募を決めました。大阪府出身で、東北地方には縁がなかったので、派遣先が女川町に決まったときは、「女川町ってどこにあるんだろう？」という状態でした。

## 通信社で勤務した経験を活かし、広報係として活躍

応援職員として女川町に赴任し、広報係に任じられました。主な仕事は次の4つです。

- ◆ 町民向け広報誌「広報おながわ」の編集・発行・配達
- ◆ 主に町内で行われるイベント・行事の写真撮影
- ◆ 町のHPやTwitterの更新・管理業務
- ◆ 報道対応・情報発信全般

これらの仕事をひとりでこなしています。以前、通信社で勤務していた経験が、非常に活かしているそうです。

町の広報を行うにあたって意識しているのは、新聞やニュースで女川町を取り上げてもらえるようなチャンスを常に探すことです。例えば以前、2m46cmの巨大なイカが女川港で発見されたことがありました。ネタとしては面白いですが、こちらから発信しなければ報道されることもありません。新聞各社やテレビ局へ電話をかけ、某局では当日のトップニュースとして取り上げてもらいました。

## Q&A

### Q1. 広報担当としてとても生き活きと働いていらっしゃるようです。お仕事のやりがいは何ですか？

取材や撮影を通して常に最前線で復興に関われるというのは、広報担当の大きな魅力です。例えば2015年の3月に、町の復興の象徴として女川駅が完成した時は、係長と2人で報道各社への対応を行いました。3月21日の完成当日、全国の報道関係60社140人が女川町へ集結したことは忘れられません。被災地の中で最も早く再建されたシンボリックな建物だったので思い入れも強く、女川駅についてのニュースが全国で放送されていることに興奮しました。赴任当初は何もなかった町が日々復興に向けて変化していく様子はとても感慨深いですし、その過程に自分が少しでも貢献できていれば嬉しいです。

これまで、町で4年以上にわたって広報を担当し、大小合わせて年間100~150の行事・イベントの撮影に携わりました。地域のイベントにはほぼ全て出席してきたので、多くの町民と顔見知りです。時間が合えば一緒に食事に行くような近い距離で町民と接することが出来るのも、今の仕事の魅力の一つです。町のことを良く知っているからこそ、面白いニュースをすぐにキャッチし、広報誌に載せたり、報道機関にアピールしたりすることが出来ますね。



「広報おながわ」は月に1度発行される町の広報誌。地元のイベントの様子等が写真つきで紹介される。



宮城県女川町 総務課秘書広報係

## 坂本 卓也 さん

年齢: 36歳

出身地: 大阪府

※復興庁スキーム → 市町村任期付職員 →  
他自治体任期付職員

### ● 経歴 ●

平成17年	通信社へ入社
平成22年	青年海外協力隊としてモロッコへ派遣
平成25年	復興庁市町村応援職員として女川町に駐在
平成28年	女川町任期付職員として勤務
平成29年	兵庫県任期付職員として女川町に派遣

**Q2. 復興庁市町村応援職員(女川町駐在)→女川町任期付職員→兵庫県任期付職員(女川町派遣)と、長期にわたり女川町に勤務していらっしゃいます。町で長く働こうと思った理由は何ですか？**

復興庁の応援職員として女川町に赴任した当初は、任期が終わったら別の仕事をしようと考えていました。しかし、もう少し町が復興するのを見ていたいという想いがあったことと、非常に働きやすい環境であったことから、町の任期付職員として残ることを決めました。女川町はコンパクトな町同様、役場内でも町長や副町長との距離が近く、地元職員も温かく迎え入れてくれています。役場の中に人のつながりが出来たことで、「もう少し残ろう」という気持ちが強くなりました。

女川町での勤務も今年で6年度目を迎えます。震災2年目以降の町の復興の流れをよく知っているからこそ、広報という仕事で益々活躍できているという実感があります。年を重ねるにつれて、町民のみなさんや役場、地元の報道機関との関係が深くなり、より広報の仕事がしやすくなりました。

**Q3. プライベートの過ごし方について、教えてください。**

業後や休日は山登りや海釣りを楽しむほか、ボランティアで石巻の小中学生のクラブチームを相手に卓球を教えています。得意なことで地域の子供たちの成長に貢献できるのは嬉しいですし、自分としても良いリフレッシュになっています。

業務上、イベントの記録や写真撮影で土日のどちらかは出勤になることが多いため、休日は町を離れて、自分の時間をしっかり持つことを意識し、オンとオフを切り換えています。

**これから被災地で働く方へメッセージ**

外部から被災地へ飛び込むのは少し勇気が要るかもしれませんが、どれだけ親しくなっても実際に被災した方の気持ちを理解するのはとても難しいですが、それでも、町民みなさんや役場職員との繋がりを大切に、そして寄り添いながら仕事に取り組むことで、自分なりのやりがいと、町にいる意味を見つけていけるはずです。これから被災地で活躍されるみなさんを、応援しています！

※平成30年3月作成